

香川方言の「なんしょん」「なんしょんな」の 文末イントネーションの意味・機能について

轟木靖子¹・飯田奈津美²

1 はじめに

本稿は、香川方言で会話の開始時によく使用される「なんしょん」「なんしょんな」の文末音調と意味・機能の関係について、世代差・地域差をふまえ分析・考察をおこなう。

「なんしょん(ナン「ショ」ン；「は低い拍から高い拍への上昇を、」は高い拍から低い拍への下降をあらわす)」「なんしょんな(ナン「ショ」ンナ)」は「何をしているの?」という意味で香川方言話者の間では、挨拶のように会話の最初によく使われる言い方である。もともと「なんしょんな」が使われていたようだが、最近の20代は文末の「な」をつけない「なんしょん」という言い方をよく使っているという飯田(2017)の結果を踏まえ、同論文の調査データを再検証し、文末詞「な」の有無と文末音調に対応した意味・機能について考察する。

2 上昇調の2種について

文末音調については、郡(2015)により、音声的には疑問型上昇調、強調型上昇調、平坦調、上昇下降調、急下降調、無音調の6種類を認める。このうち、意味の区別に関与するという点で文末音調を考えた場合、平坦調は強調型上昇調の変種、急下降調は上昇下降調の変種である。

本稿で関係するのはこれらの音調のうち疑問型上昇調、強調型上昇調、無音調である。疑問型上昇調は、轟木(2016a)の疑問上昇である。疑問文の末尾に典型的にみられる上昇で、疑問をあらわす「か」がつかなくても、文末をこの上昇で言えば尋ねているように聞こえる。強調型上昇調は、轟木(2016a)のアクセント上昇である。語アクセントの低い拍から高い拍への上昇と同様の上昇の仕方であり、強く主張するときに語末拍を際立たせて発音させるときにも見られる音調である。「帰るの(カ「エルノ)」の「の」を疑問型上昇調で発話すれば、帰るかどうかが尋ねる発話に、強調型上昇調で発話すれば「絶対に帰るんだ」と主張している発話になる。

無音調は、特別な上昇や下降もなく語アクセントに従っただけの音調である。轟木(2016a)では平坦としているが、かならずしも平坦ではないこと、また郡(2015)の平坦調(強調型上昇調の上昇が顕著でないもの)と区別がつきにくいいため、本稿では無音調の呼称を用いる。

また、発話の音調については近畿音声言語研究会(2008)に基づき、以下の記号を用いる(注1)。

1 香川大学教育学部

2 香川大学教育学部H29.3卒業(現・公益財団法人 香川県総合健診協会)

モーラ間の上昇(低い拍から高い拍へ)	「
モーラ間の下降(高い拍から低い拍へ)	」
疑問型上昇調	↗
強調型上昇調	↑

3 「なんしょん」「なんしょんな」の音調と意味・機能について

3.1 「なんしょん」「なんしょんな」について

「なんしょん」「なんしょんな」は香川方言話者同士が会話を始めるときに声をかける言い方としてよく使われる表現である。標準語に訳すと「何をしているの?」という意味であるが、聞き手のしていることを知りたくて尋ねているとはかぎらず、聞き手のしていることはある程度わかっている、自分もそこに加わりたいとか、自分の話につきあってほしいときの話のとっかかりとしての機能も大きいようである。

会話例

- A:「なんしょん?」
 B:「ご飯食べよる」
 A:「いっしょに食べてもええ(ん)?」
 B:「ええよ」

この場合、AはBが食事中であることは見てわかるが、いっしょにそこで食事を取りたいことを伝える前に「なんしょん?」で会話をスタートさせている。この会話例の最初の発話「なんしょん?」の文末は疑問型上昇調である。

しかし、「なんしょん」には、文末を上昇させない言い方があるほか、「なんしょんな」という言い方も聞かれることがある。文末の「な」を普段つけないという話者に尋ねると、「『な』をつけるときついかんじがする」「親が子どもをたしなめているように聞こえる」という意見があるいっぽうで、「なんしょんな」の「な」を上昇させた言い方について「やさしい感じがする」という者も「聞いたことがない」という者もいる。また、上昇についても、疑問型上昇調と強調型上昇調を区別する話者も区別しない話者もいるようである(注2)。

本稿では、飯田(2017)でおこなった27名の聞き取り調査のデータを再度検証し、あらたに香川方言話者2名の内省データを加え、「なんしょん」「なんしょんな」の文末音調の区別と対応する意味・機能についての分析・考察をおこなう。

3.2 「なんしょん」「なんしょんな」の聞き取り調査

3.2.1 調査の概要

飯田(2017)では、さぬき市(香川県高松市の東隣り)で生育した飯田の発音する「なんしょん」「なんしょんな」「ご飯食べたん」「ご飯食べたんな」の文末部分を変化させた発話の音声資料を、香川県で言語形成期を過ごした20代から80代までの話者27名に聞いてもらい、自分が使うかどうか、どんな時に使うか、使わない場合でも聞いたことがあるか、どんな感じがするか、等の質問に答えてもらった。調査時期は2016年8月から10月まで、一人あたりの調査時間は30分から40分程度であった。以下、本稿の対象とする「なんしょん」「なんしょんな」に関する部分について整理して提示する。また、今回新たに追加した2名(高松市40代女性、さぬき市20代女性)の調査結果も併せて示す。

音声資料 ()内は最終拍の音調を示す

- (1) なんしょん(無音調) ナン「ショ」ン (図1)
- (2) なんしょん(疑問型上昇調) ナン「ショ」ン (図2)
- (3) なんしょんな(無音調) ナン「ショ」ンナ (図3)
- (4) なんしょんな(疑問型上昇調) ナン「ショ」ンナ (図4)
- (5) なんしょんな(強調型上昇調) ナン「ショ」ン↑ナ (図5)

被調査者 29名 内訳 (数字は年代、Mは男性、Fは女性、()の数字は人数をあらわす)

観音寺市	20M(1)				
善通寺市	20F(1)	20M(1)			
丸亀市	20F(2)	40F(1)			
宇多津町	20F(1)				
坂出市	20F(2)				
高松市	20F(4)	20M(2)	40M(1)	40F(1)	50M(1)
三木町	20F(1)				
さぬき市	20F(4)	50M(1)	80F(1)		
東かがわ市	20F(1)	50F(2)	80F(1)		

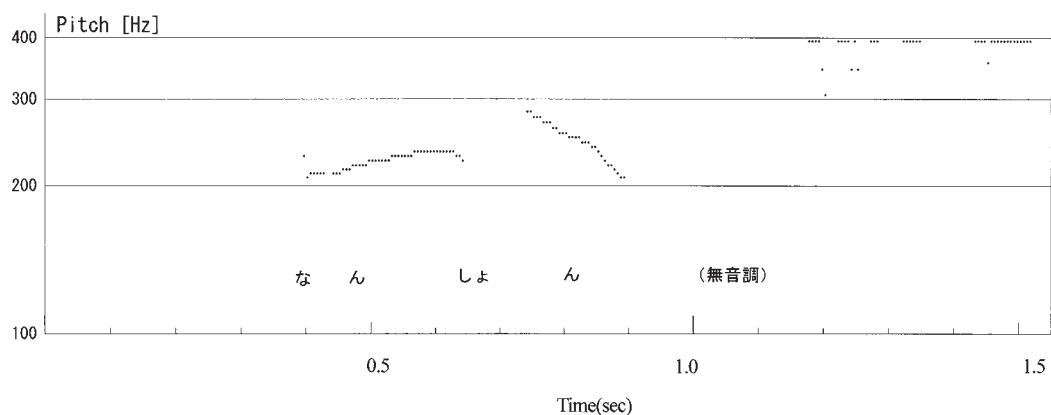


図1 なんしょん(ナン「ショ」ン)無音調

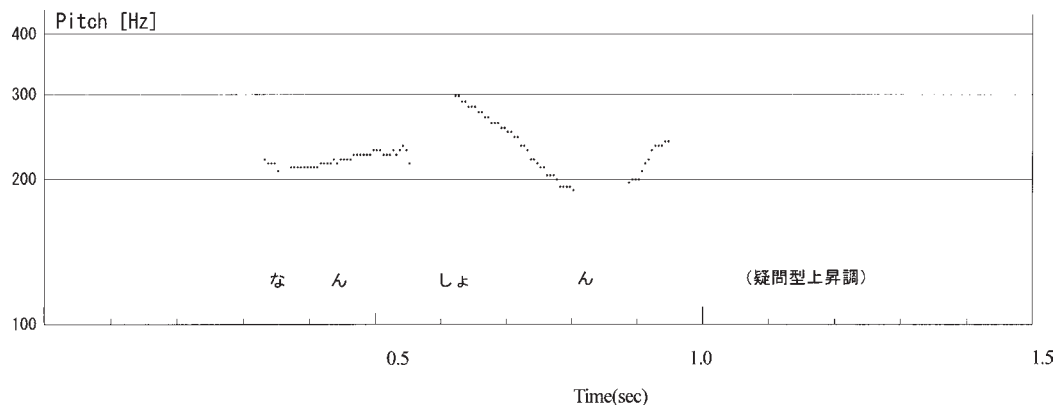


図2 なんしょん(ナン「ショ」ン)疑問型上昇調

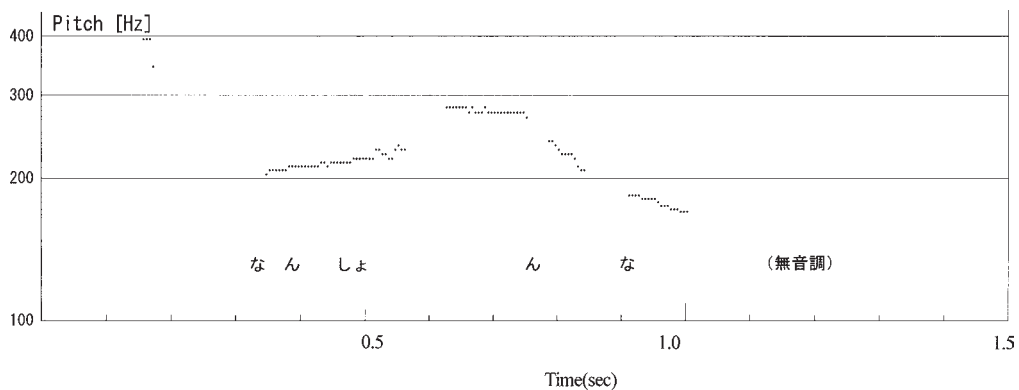


図3 なんしょんな(ナン「シヨ」ンナ)無音調

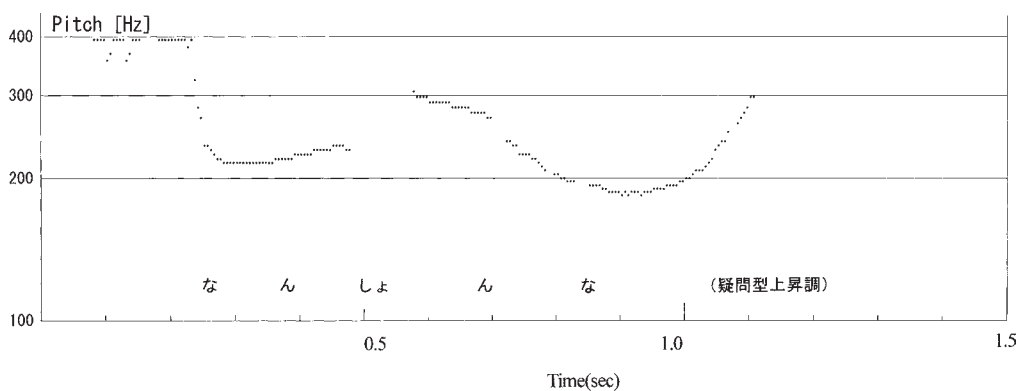


図4 なんしょんな(ナン「シヨ」ンナ)疑問型上昇調

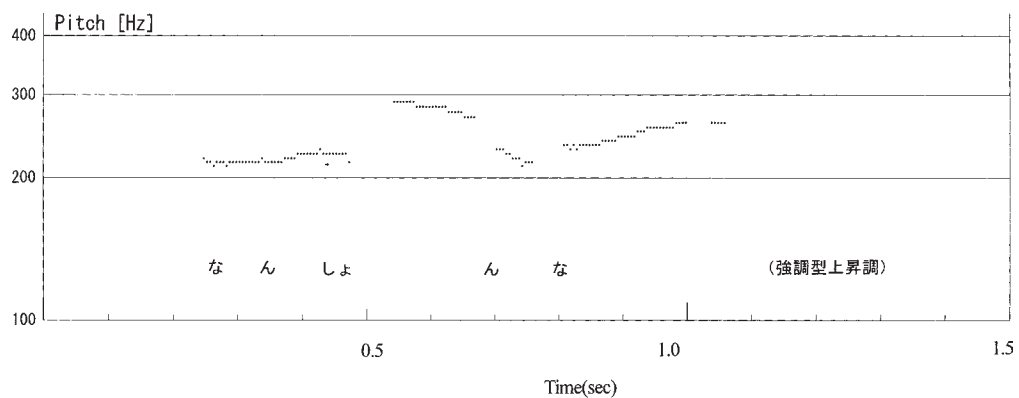


図5 なんしょんな(ナン「シヨ」ンナ)強調型上昇調

3.2.2 調査結果

調査結果は以下のとおりである。「使う」という回答者には「どんなときに使うか」「使わないが聞く」という回答者には「どんなふうに聞こえるか」を尋ねた。その回答を整理して示す。

(1) なんしょん(無音調) ナン「ショ」ン

使う(25名) 使わないが聞く(4名) 聞いたことがない(0名)

どんなときに使うか(使う(25名))

尋ねるとき、あいさつ、注意するとき

どんなふうに聞こえるか(使わないが聞く(4名))

きついかんじ、注意するとき、形式的にあいさつをしている

(2) なんしょん(疑問型上昇調) ナン「ショ」ン

使う(27名) 使わないが聞く(2名) 聞いたことがない(0名)

どんなときに使うか、どんなふうに聞こえるか(使う(27名))、使わないが聞く(2名) 共通)

尋ねるとき、あいさつ

ナン「ショ」ン(無音調)よりも優しい、興味がある、自分が参加したい

一部、(1)のほうがやさしく、この言い方はつっこむときに使うという回答あり

(3) なんしょんな(無音調) ナン「ショ」ンナ

使う(15名) 使わないが聞く(14名) 聞いたことがない(0名)

どんなときに使うか(使う(15名))

ナン「ショ」ン(無音調)と同じ

注意する、ちゃかす、つっこむ、あきれてるとき

強めに注意する、怒ってる、否定的、家族に言う

どんなふうに聞こえるか(使わないが聞く(14名))

親(あるいは祖父母)から怒られているかんじ

年寄りのやさしい挨拶

優しそうに聞こえて違和感あり

(4) なんしょんな(疑問型上昇調) ナン「ショ」ンメナ

使う(7名) 使わないが聞く(16名) 聞いたことがない(6名)

どんなときに使うか(使う(7名))

あいさつ、やさしく尋ねる

どんなふうに聞こえるか(使わないが聞く(16名))

年配者が使っているイメージ

優しい感じがする

怒っている感じがする

(5) なんしょんな(強調型上昇調) ナン「ショ」ン↑ナ

使う(7名) 使わないが聞く(13名) 聞いたことがない(9名)

どんなときに使うか(使う(7名))

子どもに対して、やさしく言う

ナン「ショ」ンメナ(疑問型上昇調)と違いなし

どんなふうに聞こえるか(使わないが聞く(13名))

年配者が子どもに対して使う

祖父母が孫に怒るとき

ナン「ショ」ンメナ(疑問型上昇調)よりやさしい、機嫌がよい感じ

ナン「ショ」ンメナ(疑問型上昇調)と変わらない

3.3 調査結果からわかること

「なんしょん」はナン「ショ」ン(疑問型上昇調)が最も使用者が多く(29名中27名)、これは親しみをこめた挨拶で、会話の継続や聞き手がしている行動に自分も参加したいときに使われることが多い。

末尾を上昇させないナン「ショ」ン(無音調)は、同様のあいさつであるが、疑問型上昇調にくらべると、それほど相手に関わるつもりはないときにも使用したり、あるいは注意するときを使うという回答が多かった。自分でこの言い方を使わない話者のほうが「きつい」と感じるようである。

「なんしょんな」は、ナン「ショ」ンナ(無音調)の使用者が29名中15名で、「なんしょん」の29名中25名に比べると使用者は減る。このうち、観音寺や丸亀など香川県西部の話者の一部はナン「ショ」ン(無音調)と同じと回答している(29名中3名)が、他の話者は注意しているとき、怒っているとき、家族に使う、等であった。この言い方を使用しないが聞いたことがあるという回答者は、ほとんどが親や祖父母から怒られている感じ、としており、それは「使用する」としている話者の内省と一致している。一部、「やさしそうに聞こえる」と答えた者もいた。

「なんしょんな」の疑問型上昇調ナン「ショ」ンメナと強調型上昇調ナン「ショ」ン↑ナについては、使用者はさらに減り、いずれも29名中7名であった。このうち、この二つの言い方をどちらも使うと答えた者は、40丸亀F01、20高松F01、50高松M04、80さぬきF01、80東かがわF01の5名であり、とくに地域や年齢層に偏りはないようである。このうち、80東かがわF01は二つの上昇調に差がないと答えたが、丸亀と高松の話者は、ナン「ショ」ン↑ナ(強調型上昇調)について、子どもに話しかけるときの言い方であると答えている。80さぬきF01は、どちらかというとなん「ショ」ンメナ(疑問型上昇調)のほうがやさしく聞こえると回答した。

ナン「ショ」ンメナ(疑問型上昇調)またはナン「ショ」ン↑ナ(強調型上昇調)のどちらか片方のみ使用するという話者は、ナン「ショ」ンナ(無音調)よりやさしい言い方という回答が多かった。

しかし、ナン「ショ」ン↑ナ(強調型上昇調)を使用しない回答者のほとんどが、この音調について「やさしい」またはナン「ショ」ンメナ(疑問型上昇調)と変わらない」と答えていたのに対し、ナン「ショ」ンメナ(疑問型上昇調)を使用しない回答者の一部は、この音調について「急かしている、怒っている」という者もあり、また年配者が使用しているという回答が多かった。

4 考察

今回の調査では、ナン「ショ」ン(疑問型上昇調)、ナン「ショ」ン(無音調)はあいさつや会話の開始、ナン「ショ」ンナ(無音調)は注意、ナン「ショ」ンメナ(疑問型上昇調)、ナン「ショ」ン↑ナ(強調型上昇調)はやさしい言い方、という傾向がみられた。若い世代では「な」を使用しないという話者も増えている。おそらく、もともとはナン「ショ」ンナ(無音調)があいさつに、そしておそらくショを大きく上昇させた言い方が注意するときの言い方として使われており、やさしい言い方としてナン「ショ」ンメナ(疑問型上昇調)またはナン「ショ」ン↑ナ(強調型上昇調)があったと考えられる。しかし、「な」をとまわらない「なんしょん」があいさつや会話の開始の機能を担うようになるにつれて、ナン「ショ」ンナ(無音調)は注意する場合やあきれて言う場合のように、使用される場

面が限られてきていると考えられる。さらに若い世代では「な」をつけない話者も増えており、ナン「ショ」ンナ（無音調）の注意するときの用法は、ナン「ショ」ン（無音調）のショの上昇を大きくさせた発話が担っているようである。また、ナン「ショ」ンメナ（疑問型上昇調）、ナン「ショ」ン↑ナ（強調型上昇調）のやさしい言い方はナン「ショ」ン（疑問型上昇調）の最終拍の上昇を長めにゆっくりにさせることであらわされるようであり、「なんしょん」に「な」をつける話者は減っているようである。

しかし、本稿では報告できなかったが、「な」を「ご飯食べたん」につけた「ご飯食べたんな」という言い方は、「なんしょんな」を使わないという回答者の中にも使うという者もいたほか、「親が子に」という言い方であるため今の段階では自分がその立場にないために使わないという者もいた。ナン「ショ」ンメナ（疑問型上昇調）またはナン「ショ」ン↑ナ（強調型上昇調）のどちらも使うと答えた者のうち、4名は、同様にゴ「ハンタベ」タ「ン」メナ（疑問型上昇調）もゴ「ハンタベ」タ「ン」↑ナ（強調型上昇調）も使用しており、より優しい感じであるかどうか、あるいは相手が子どもかどうか、のような点で区別していることが多かった。

また、「な」の疑問型上昇調と強調型上昇調の違いについて「区別できない」という回答者は、二つの上昇調を音声的に聞き分けているけれども意味に差が無いと答えているのか、音声的にも聞き分けていないのかまでは確認することができなかった。また、片方の上昇調のみ使用していて、もう片方の音調を「聞いたことがない」とする回答者も、二つの上昇調の違いを答えた回答者もいた。

文末詞「な」の音調という点で言えば、今回はあいさつとして用いられる言い方についての分析であったため、やや特殊なケースの可能性もある。通常の文末についての場合の分析と併せた検証が必要である。また、もともと香川方言の「な」が文末詞の分類としてどのような系譜に属するのかについても含めた考察もおこないたい。

謝辞

調査に御協力いただいた皆様に感謝いたします。本稿は、近畿音声言語研究会2017年11月月例会で轟木が発表した『香川方言の『なんしょん』『なんしょんな』の文末イントネーションについて』を加筆・修正したものです。ご意見、コメントをくださった出席者の皆さまに感謝申し上げます。

注

- 1 近畿音声言語研究会（2008）では、疑問型上昇調、強調型上昇調という名称は使っておらず、「東京方言の疑問文末に典型的に見られるような上昇調」「東京方言の終助詞『の』を強い主張の意図で使う際の上昇調」としている。
- 2 疑問型上昇調と強調型上昇調については、たとえば東京方言をベースにした共通語の終助詞「ね」では区別される場合がある（轟木（2016b））。

引用・参考文献

- 飯田奈津美（2017）「香川県の方言の地域差と世代差について - 「なんしょん（な）」「ご飯食べたん（な）」を中心に -」平成28年度香川大学教育学部人間発達環境課程国際理解教育コース卒業論文
- 近畿音声言語研究会（2008）「本号で使用する音調記号について」『音声言語VI』近畿音声言語研究会、冒頭頁。
- 郡 史郎（2015）「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」『言語文化研究』（大阪大学大学院言語文化研究科）第41号、85-107。
- 轟木靖子（2016a）「終助詞の音調の記述方法について」『日本語学』vol.35-11、12-23。
- 轟木靖子（2016b）「終助詞『ね』の2種類の上昇音調について - 聴取テストに基づく分析 -」『音声言語VII』近畿

音声言語研究会, 49-63.

森木靖子(2017)「香川方言の『なんしょん』『なんしょんな』の文末イントネーションについて」近畿音声言語研究会月例会発表資料. 2017年11月14日, 於: 西宮市大学交流センター